

高齢者の「小遣い」について 調査から見た「小遣い」とサクセスフル・エイジングとの関係

高齢社会に入ったわが国では、高齢者の消費行動が経済はじめ各方面に及ぼす影響が強まり、関連した調査研究も少なくありませんが、未だ緒に就いた段階にあると考えられます。当財団では、企業退職高齢者の退職後の新たなライフスタイルの形成および社会活動参加プロセスを明らかにする研究の一環として、「小遣い」に着目した調査研究を行うことにより、わが国の高齢社会におけるサクセスフル・エイジングの具体的な事例を提示することができる可能性があるのではないかと考え、本テーマでの研究を始めました。

はじめに

本研究では「小遣い」を、高齢者が自身の活動を実践してライフスタイルを具現化するための代表的な手段と考え、高齢者の「小遣い」の使い道・使い方等について調査研究を行うこととしました。

「小遣い」とは通常、他に分類されない雑多な消費支出とされ、明確な定義が与えられてはいないと見られます。一般に金額も少なく、ほとんど注目されてきませんでした。しかし、以下に述べる研究フィールドの「ダイヤ・アクティブエイジング・アソシエーション(DAA)」会員のよう、経済的なゆとりがある階層の暮らしぶりを考える際には、彼らのライフスタイルの特徴を分析するうえで「小遣い」は有効な指標になりうるのではないかとこの仮説に基づき、研究テーマとして「小遣い」を設定しました。

研究方法としては、高齢者が健康でいきいきと自分らしく様々な社会参加ができるよう支援していくとの趣旨のもと、当財団が1999年6月に賛助会員会社

の退職高齢者を組織化したDAAを研究フィールドとし、その会員にインタビュー調査、アンケート調査を行い、さらに事例調査として小遣い簿を記帳していただくという3つの調査を段階的に実施することにより、サラリーマンOBの退職後の暮らしぶりを「小遣い」に即して分析し、「小遣い」とサクセスフル・エイジングの関係を考察することとしました。

調査内容および調査結果について

上記3つの調査の内容および結果は以下のとおりです。

(1) 小遣いの考え方・使い道等に関する インタビュー調査

● 調査内容

まず、高齢者の小遣い観の概念化を図るため、DAA会員に小遣いの考え方およびその使い道・使い方等について個別インタビューを実施しました。インタビューは、「小遣いとはどのようなものと考えているか」、「小遣いの使い道はどうなっているか」および「小遣いの使い方はどうしているか」という点を中心にに行いました。

調査時期は2007年12月～2008年2月、対象者はDAA会員の男性高齢者11名、対象者の平均年齢は69.9歳(62～74歳)、全員が有配偶者でした。

● 調査結果

彼らの小遣いの概念として、以下の共通認識が得られました。

- ①考え方：小遣いとは「自分の意思に基づいて」、「自分の趣味・嗜好・娯楽といった楽しみのために」、「自分で自由に使える」おカネである。
- ②使い道：小遣いの費目で特に変わった使い方はして

図1 小遣いの意識と実態等に関するアンケート調査
 (あなたにとって「小遣い」とはなにか(あてはまる番号すべてに○)【上位5項目】)

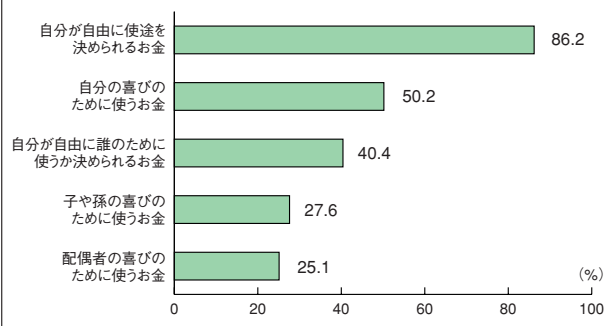


図2 小遣いの意識と実態等に関するアンケート調査
 (あなたの「小遣い」の金額は誰が決定するか(1つに○))

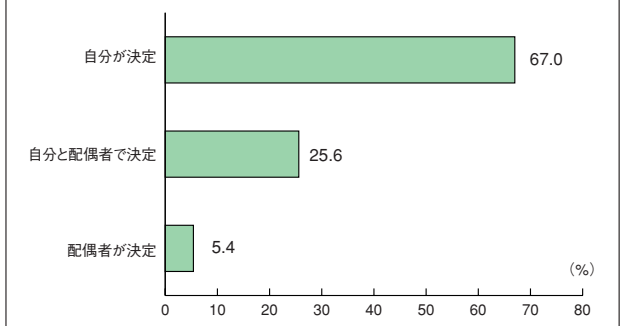


図3 小遣いの意識と実態等に関するアンケート調査
 (あなたの「小遣い」は平均して月どの程度か(1つに○))

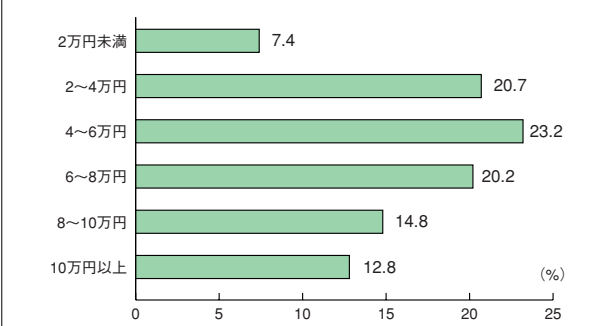
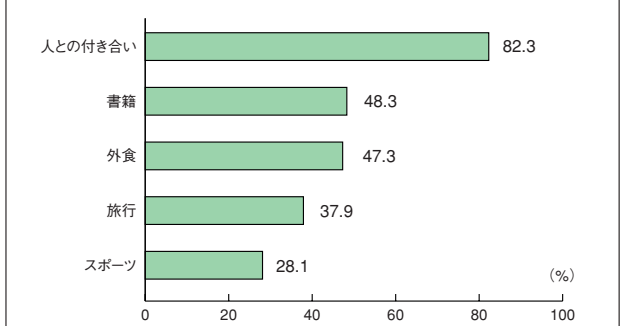


図4 小遣いの意識と実態等に関するアンケート調査
 (あなたの「小遣い」の主な用途はなにか(3つまで○)【上位5項目】)



いないが、何におカネを使っているかはその人が何を志向しているかを示す。

- ③使い方：経常的な費用は自分が管理し、赤字が出そうな場合なるべく節約するようにしているものの、だからといって、本当に自分のやりたいことまで抑えたりはしない。つまり、小遣いはその人のライフスタイルを遂行するために必要なものである。
- ④「外出」との関連性：高齢者の楽しみとは活動することで、活動とは外出することであり、外出すれば小遣いを使う。

このように彼らは、自身のライフスタイルとして生きがい活動や趣味活動を含む多彩な活動を外出して展開するという充実した暮らしを送っており、そこにおカネをつぎ込んでも惜しいとは思っておらず、小遣いはそういったおカネとしての重要性が高く意識されていることが窺えました。

(2) 小遣いの意識と実態等に関するアンケート調査

●調査内容

インタビュー調査により、DAA会員は経済的なゆ

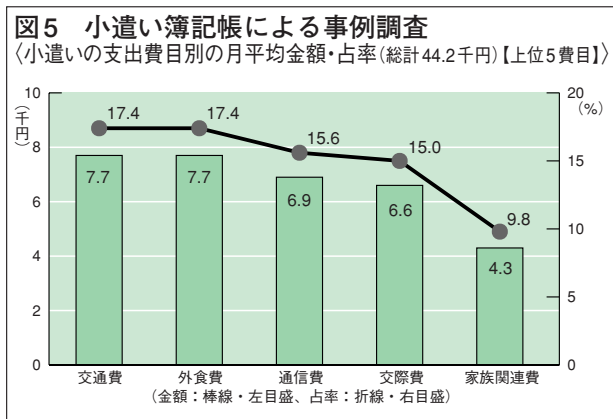
とりを持ち、かつ健康で、活発な社会参加を行っており、そうした活動に小遣いを使っていることがわかりました。そこで、彼らのサクセスフルかつアクティブな生活実態をさらに詳しく明らかにするため、次にDAA会員全員を対象として小遣いの意識と実態等に関するアンケート調査を実施しました。

アンケート調査は、インタビュー調査の結果に基づいて、「小遣いとはなにか」、「小遣いの金額は誰が決定するか」、「小遣いは平均して月どの程度か」、「小遣いの主な用途はなにか」および「週何回くらい外出するか」等について質問しました。

調査時期は2008年4～5月、対象者数は274名、回答者数は203名(回収率74.1%)、回答者の平均年齢は72.9歳(57～88歳)でした。

●調査結果

回答者の9割近くにとって小遣いとは「自分が自由に用途を決められるお金」で(図1)、彼らの7割弱が小遣いの金額を「自分一人で決定」し(図2)、「月平均4～6万円程度」の小遣いを使っています(図3)。また、小遣いの用途を見ると、「人との付き合い」が



約8割と圧倒的な高さにあるほか、「外食」、「旅行」、「スポーツ」も加えると(図4)、ほとんどが「外出」と密接に結び付いており、実際に彼らの7割強が「週に4日以上」という高い頻度で外出しています。

これにより、彼らが小遣いの金額・使途を自分で自由に決め、頻繁に外出して、人との付き合いを中心に小遣いを積極的に使っている様子を窺い知ることができました。

(3) 小遣い簿記帳による事例調査

● 調査内容

さらに、こうしたインタビュー調査およびアンケート調査の結果に基づき、小遣いの内容・費目を整理して実際に小遣い簿を作成し、DAA会員数名に費目に沿った記帳を要請し、小遣い簿記帳による事例調査を取り進めました。

回収できた事例は1例(以下、A氏)にとどまったものの、小遣いの金額・用途・外出頻度等でDAA会員全員対象のアンケート調査結果の平均値に近い特徴を有しており、ある程度DAA会員の一般的な姿を表現しているとも考えられます。

A氏は70歳台の男性で、記帳時期は2008年11月～2009年2月の4ヶ月間でした。

● 調査結果

A氏の小遣い簿の記帳結果によれば、「月平均4万円強」の小遣いの多くを「交通費」、「外食費」、「通信費」、「交際費」といった「人との付き合い」に支出しています(図5)。「半分近くの日数」で外出して「買い物」、「会員組織の活動」、「外食」、「友人・知人の

所」等の複数要件で積極的に外出しています。

また、A氏への補足聞き取り調査によれば、遠くまで出かけて学生時代・会社時代からの友人と積極的に交流して交通費・交際費・外食費を使っているほか、地元の子ども会への参加やサッカーチームの応援など地域活動にも積極的に取り組んでいます。近場での買い物にも身軽に出かけて、健康面でよい生活習慣になっています。通院での外出も多くなっていますが、公共交通機関を利用して一人で通院可能であり、運動効果もあって、通院に外出できるほど元気で健康ともいえます。

考察および結論について

DAA会員である高齢者は、現役時代はいわゆる企業戦士として戦後日本経済の高度成長を牽引してきた方々ですが、本調査を通じて、退職後の現在においても持てる気力(積極性)・経済力(おカネ)・体力(健康)を活用して人との付き合いのために頻繁に外出して活動し、「小遣い」を使うことを楽しんでいる姿が明確になりました。

本研究は、多くのDAA会員が「小遣い」をこれらの活動を支える費用として意識していることを明らかにしました。彼らにとって「小遣い」とは、生きがいと活力に満ちた生活を楽しむ一つの必要条件なのです。「小遣い」は、企業退職高齢者のライフスタイルの形成において、また彼らのマンパワーの活用のためにも、重要な役割を果たしていることが示されました。

高齢社会を迎えた現在、医療や介護・年金を始めとして山積する諸問題の解決の必要性が叫ばれるなか、一方ではわが国にとって望ましいこうした元気で活発に行動するアクティブでサクセスフルなライフスタイルを送る高齢者がいるという貴重な具体例を得ることができたと考えています。(西澤良徳)